

日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴 －「主張」に着目して－

伊集院郁子 (東京外国語大学)

高橋圭子 (東洋大学)

【キーワード】 意見文、文章構造、主張、頭尾型、タイトル

0 はじめに

日本の大学への進学を目指す留学生は、日本語でアカデミックな文章を執筆する能力の習得が求められる。アカデミックな文章とは、自分の「主張」とそれを支える「論拠」が論理的に組み立てられた文章で、論文やレポートがその代表である。多くの日本語教育機関ではアカデミックな文章指導の準備段階として「意見文」の指導を行っており、その指導項目には、「主張」や「論拠」をどこに配置し文章を展開していくかという「文章構造」に関する指導も含まれる。作文の評価に関し、文法面より構成面が重視されるという報告があること（田中他1998、長谷川・堤 2007）、効果的な日本語意見文には、書き始める前に十分に構想を練ることや文章のジャンルについて十分な知識を持つことが必要であること（吉田2011）がすでに指摘されており、文章構造指導の重要性は明らかである。しかし、日本語の意見文ではどのような文章構造が典型とされているのか、母語話者と比較して学習者の意見文にはどのような特徴が見られるのかについてはまだ明らかにされておらず、具体的にどのように文章構造を指導したらよいのか、教育現場には戸惑いの声もある。

そこで、本研究では、意見文に必須の要素である「主張」に着目し、①文章構造の型と主張の位置、②タイトルの形式と機能、③タイトルと文章構造の関係、④主張の述べ方、の4点について、母語話者による日本語意見文の基本となる型を抽出し、学習者の意見文との相違を観察する。本研究で明らかにする文章構造の特徴に基づき、今後その要因に切り込むことによって、学習者の母語や習得段階に応じた文章表現指導に役立て得ると考える。

1 先行研究

日本語の文章構造は、伝統的には「起承転結」型の結論を最後に述べるタイプが一般的である、と言われている。実際に、新聞の社説やコラムなど意見を述べることを主たる目的とした文章の先行研究では、やはり、意見・主張・結論を文章の最後に述べるタイプが多いと報告されている（杉田1994、メイナード1997、李2008）。また、「読み手責任／書き手責任」という観点から言語の類型を論じた Hinds (1987) でも、朝日新聞の天声人語を例に起承転結の文章構造を取り上げ、日本人の英語学習者には、英語での書きのプロセスは日本のもの

と異なることを指導する必要があると述べている。一方、大学生による意見文や新聞の一般投書を分析した先行研究では、文章のはじめとおわりの2箇所で見・立場・主張を述べる、という文章構造が多いことも報告されている（木戸1992、佐々木2001、Lee 2006）。

先行研究のこのような結果の相違は、文章の書き手と書く目的の相違に起因すると考えられる。つまり、新聞の社説やコラムは、最後まで読み手の注意を引きつけて書き進める力があるプロの書き手によるもので、公的な立場から広く社会に問題提起や提言をすることを目的に書かれたものである。一方、投書や意見文の書き手はプロではなく、執筆の目的は個人の体験談や感想、主張を読み手に伝えることにある。大学生による意見文の場合は、指定された題目について限られた字数内でまとめるという条件もつく。そのため、荒木他（2000）、佐渡島他（2008）でも指摘されているように、文章のはじめに意見・主張を述べる方が読み手に伝わりやすく、書き手自身も書き進めやすいと思われる。

表1 日本語の文章構造に関する先行研究

	データ／分析方法	調査対象の内訳	日本語母語話者による文章構造	日本語学習者による文章構造
杉田 1994	論説文の文配 列課題／ 文単位	母語話者：大学生および 大学院生32名。 学習者：上級レベルの中 国語母語話者18名、韓国 語母語話者20名、英語母 語話者13名。	「一般論（陳述）→特定 の話題（陳述）→一般論 （主張）」という型が抽出 され、主張をまとめて文 章の最後に配する傾向が 見られる。	ばらつきが大きく母語別 の特徴は見出しにくい。ただ し中国語・英語母語話者は、 主張が分散されることが多 いため、話題の推移がより 複雑になる。
佐々木 2001	日本語作文／ 文字数で文章 を区分	母語話者：学生による意 見文52編。 学習者：中国語母語話者 による43編。レベルはさ まざま。	「（話題提示）→自分の立 場表明→理由の説明→結 論」という構成が94.2% を占める。	JPと異なり学習者の文章に はプロトタイプ的な構成は 見られない。
Lee 2006	日本語作文／ 不明	母語話者：日本人学生36 名による意見文のうち、 完成した29編。 学習者：上級レベルの中 国語母語話者46名、韓国 語母語話者11名、その他 1名による意見文のうち、 完成した49編。	双括型18編 尾括型7編 頭括型0編 散括型2編 中括型0編 無括型1編 中尾型1編	双括型19編 尾括型12編 頭括型6編 散括型3編 中括型1編 無括型1編 中尾型7編 主張文の位置についてはJP と大きな差はない。

本研究と同様、日本語母語話者（以下、JP）と学習者による作文を分析対象とした先行研究は表1のとおりであるが、文章の区分や主張の認定といった分析方法の客観的基準が示されていない、学習者の母語や習得レベルがまちまちである、データ数が十分でない、などの問題点がある。また、文章構造と具体的言語表現との関係も分析されていない。

本研究では、一定数のデータを確保し、個々の作文の「主張」を分析者2名で厳密に認定し、タイトルや主張の述べ方などの具体的言語表現について談話レベルの分析を行うことにより、「意見文」というジャンルにおける文章構造の基本的な型を抽出し、JPと学習者の両者の日本語意見文の構造的特徴を明らかにすることを目指す。

2 本研究の枠組み

2-1 分析データと分析の方法

本研究の分析データの概要は、表2のとおりである¹。

表2 分析データの概要

執筆者	作文数	タイトル数	本文数 (平均)	段落数* (平均)	収集時期
日本語母語話者 (JP)	134	133	2176 (16.2)	553 (4.1)	2007年6月～11月
韓国人学習者 (KR)	55	55	918 (16.7)	244 (4.4)	2009年9月
台湾人学習者 (TM)	57	57	1050 (18.4)	252 (4.4)	2007年12月

*段落数は、執筆者が設けた形式段落の数である。

JPは東京都内の大学に通う日本人大学生で、KRは韓国の大学、TMは台湾の大学に通う日本語学習者である。3者ともに大学生に限定し、同等の学習背景と能力をもった執筆者を想定した。台湾および韓国でのデータ収集に関しては、日本語能力試験2級（学習時間600時間相当）以上の日本語学習者を対象とした²。執筆者情報は表3のとおりである。JPは3つの大学、KRは2大学、TMは1大学から調査対象者を募り、相当数のデータを確保するために全ての応募者を調査対象とした。そのため、執筆者の男女比、平均年齢までは厳密に統制しきれなかった。

表3 執筆者情報

執筆者	人数	性別	平均年齢
日本語母語話者 (JP)	134名	男性90名、女性44名	19.4歳
韓国人学習者 (KR)	55名	男性9名、女性46名	22.2歳
台湾人学習者 (TM)	57名	男性14名、女性43名	21.1歳

執筆者は、次に示す課題文を読み、辞書などは使用せずに約60分で原稿用紙1枚に800字程度で執筆した。KRとTMは、日本語で執筆した後で、同じ内容の意見文を母語でも執筆した。本研究で用いるデータは、このうちの日本語で執筆された作文である。

【課題文】

下の文を読んで、自分の意見を800字ぐらいの日本語で書いてください。

今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。

あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

このように収集した作文を原稿用紙に手書きされたとおりに1文1行で入力し、データベース化した。談話レベルでの分析にも適するよう、段落開始の空白マスや改行による段落終了についてもコーディングした。データベースの完成後、分析者2名で全作文について「主張」「根拠」「譲歩」など文機能のコーディングを施し、コーディングが一致しない箇所は全て、作文全体の文脈展開について解釈を協議、共有したうえで機能を決定し³、「主張」が出現した位置によって文章構造の型を分類した。

2-2 「主張」の定義

文章構造の型を分類する際は、「主張」をいかに認定するかが重要となる。本稿では、主張とは、テーマに関する書き手の意見が明確に表されているもの、と定義し⁴、以下の手順で主張の認定を行った。

- (1) 定義に従い、分析者2名が個別にコーディングしていき、両者のコーディングが一致したものを主張と認定する。
 - (2) 分析者2名のうち1名のみが主張と認定した場合は、李(2008:103)を参考に作成した以下の基準⁵に従って2名で判定しなおし、① a、bの両者、または② a、b、cのうち2項目以上当てはまる場合は、主張と認定する。
 - ① タイトルに主張が明示されている場合
 - a タイトルがそのまま反復されるもの、または、タイトルの叙述表現が形を変えて主張を表すもの
 - b 意味の完結度の高いもので、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの
 - ② タイトルに主張が明示されていない場合(タイトルが話題提示の場合、タイトルが話題提示にも主張表明にも機能する場合、タイトルから複数の主張の解釈が可能な場合)
 - a タイトルまたは課題文に提示された話題について述べられているもの
あるいは、2名の判断が「主張」と一致した文と同じ主張が反復されるもの
 - b 叙述表現が主張を表すもの(特に、第三者に対する要望や当為の文の機能をもつものが主張になりやすい。)
 - c 意味の完結度が高く、文脈への依存度が低く、他の文からの独立性が高いもの
- タイトルについては、3-2で分析と考察を行う。

3 分析と考察

3-1 文章構造の型

まず、主張が明示される位置によって文章構造の型を定義し(表4)⁶、作文を分類した(表5)。位置は、作文執筆者による形式段落に基づき、「はじめ」は第1段落、「おわり」は最終段落、「なか」はそれ以外とした。形式段落が2以下の場合、分析者2名で意味段落の認定作業を行った。

表4 主張の位置による文章構造の型

型名	はじめ	なか	おわり
頭型	○*	—	—
中型	—	○	—
尾型	—	—	○
頭尾型	○	—	○
頭中型	○	○	—
中尾型	—	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	—	—	—

*表中の○は、主張が明示されていることを示す。

表5 文章構造の型による作文数

型名	JP (%)	KR (%)	TM (%)
頭型	2 (1.5)	3 (5.5)	0 (0.0)
中型	2 (1.5)	4 (7.3)	6 (10.5)
尾型	19 (14.2)	16 (29.1)	12 (21.1)
頭尾型	81 (60.4)	15 (27.3)	18 (31.36)
頭中型	2 (1.5)	0 (0.0)	2 (3.5)
中尾型	21 (15.7)	14 (25.5)	14 (24.6)
分散型	6 (4.5)	3 (5.5)	4 (7.0)
非明示型	1 (0.7)	0 (0.0)	1 (1.8)
合計	134	55	57

表5より、JPの文章構造は頭尾型が60.4%を占め、中尾型を合わせると76.1%となり、佐々木(2001)の結果と同様に「(背景的情報)→主張→根拠→主張」という流れで意見文を構成するものが基本であった⁷。本分析は形式段落を単位としたため、執筆者の段落の設け方によって、同じような文章構造であっても頭尾型ではなく中尾型に分類される場合があったが、JPで中尾型に分類された21作文のうち7作文については、形式段落では2段落目に主張が配置されていたものの、全文数の3分の1以内に主張が現れており、実質的には頭尾型に近いものであった⁸。これらを合わせると、65.7%の作文が第1段落、あるいはそれに非常に近い位置で主張を述べていることになる。日本語の意見文や学術論文の書き方を見ると、木下(1981)、荒木他(2000)、二通他(2003)、佐渡島他(2008)など、いずれも最初または最初と最後に意見・主張・結論を述べるよう指示している。これは、欧米の理工系学術論文やパラグラフ・ライティングと軌を一にするものだが、「頭型」は伝統的な「起承転結」型との相違が大き過ぎるため定着せず、折衷的な「頭尾型」がJPの基本的構造になったのではないだろうか。

一方、学習者は頭尾型、中尾型、尾型の3つの型がそれぞれ20%以上出現しており、杉田(1994)、佐々木(2001)の先行研究の結果と同様、JPのように1つの型に集約されずに拡散している。独立性の検定(カイ二乗検定)⁹の結果、JPと学習者(KR・TM)の頭尾型の使用数の偏りは有意であった($\chi^2(2)=23.761$, $p<.001$, JP対TM: $\chi^2(1)=13.349$, $p<.001$, TM対KR: $\chi^2(1)=.250$, $p=.681$, n.s., KR対JP: $\chi^2(1)=17.171$, $p<.001$)。学習者が所属する海外の3つの大学では、いずれも「作文」という授業があるが、「作文の構成」に関してはあまり指導をしておらず、語彙・文法などの表現レベルの指導を重視しているとのことであった。そのため、文章構造については母語での書き方が色濃く現れた可能性もある。また、外国語での執筆という条件により意図する主張が十分に伝達できなかった可能性も考えられる。この点については、学習者の母語による意見文の分析や、習得レベル別の日本語意見文の分析によって、今後、考察を進めていきたい。

続いて、文章構造の「はじめ」と「おわり」に着目する。「はじめ」に主張を置く型(頭型、頭尾型、頭中型、分散型)は、JPが91例(67.9%)、KRが21例(38.2%)、TMが24例(42.1%)で、第1段落での「主張」はJPに特徴的である。カイ二乗検定の結果、JPと学習者のこれらの型の使用数の偏りは有意であった($\chi^2(2)=19.154$, $p<.001$, JP対TM: $\chi^2(1)=11.115$, $p<.01$,

TM対KR： $\chi^2(1)=.179, p=.672, n.s.$, KR対JP： $\chi^2(1)=14.275, p<.001$ 。さらに、JPは冒頭の第1文で「主張」を述べているものが64例（47.8%）、時代的背景や個人的経験に言及したものが53例（39.6%）あり、冒頭の第1文は「主張」か「背景」が基本と言える。一方、「おわり」に主張を置く型（頭尾型・中尾型・尾型・分散型）はJP127例（94.8%）、KR48例（87.3%）、TM48例（84.2%）と、いずれの意見文においても高い割合を占めている。

ただし、「おわり」の最終文に着目すると、意見文の末尾を「主張」で締めくくる例は、JPが110例（82.1%）のところKRは35例（63.6%）、TMは39例（68.4%）と、JPより数値が低くなっている。これは、次の例のように、いったん主張を述べた後に、「補足」¹⁰や「根拠」が追加されていることが多いためである。次のTMの例では、020-05から09で2つの根拠を挙げ、10で主張を述べた後に、最終文となる11で、「環境問題」というこれまでには言及していなかった新たな観点から「頑張ろうと思う」という個人的な意志を表明している。

- TM020-05 インターネットで確かにいろいろな情*報が受け取られますが、速いですから、査証しない噂の情*報もたくさんあります。「根拠1」¹¹
- TM020-06 そして噂が流れて、ときどき社会に不必要な迷惑をかけます。「根拠1」
- TM020-07 新聞や雑誌に噂は絶対ないと言えませんが、編集の人達は責任があるので、そういう噂情*報が少ないだろうと思います。「根拠1」
- TM020-08 そして、インターネットで文章を読む感じと実体の本を読むのが全然違うと思います。「根拠2」
- TM020-09 読書*なら、やはり紙の方がいいと思います。「根拠2」
- TM020-10 ですから、私は新聞や雑誌は現在の人の情*報工具として、必要だと思います。「主張」
- TM020-11 それとも、環境問題もありますので、現在の人達の共同の宿題として、頑張ろうと思います。「補足」<意見文末尾>

複数の根拠を挙げて結論としての主張を述べた後の追記は、論理的というより思いつき・場当たりの印象を読み手に与える危険性もあるため、このような文章構造がどのように評価されるか、改めて分析した上で、文章表現指導に生かす必要がある。

3-2 タイトルの特徴

続いて作文のタイトルを分析した。タイトルの機能は、李（2008）をもとに分析者2名で次のI・II・IIIの3タイプに分類した。

I 主張表明…課題文に対する書き手の意見・主張が明示されているもの

- JP 104-00 インターネットが引き起こす諸問題
- KR005-00 それでも、新聞や雑誌は必要だ
- TM035-00 新聞や雑誌はだんだんいらなくなります

II 話題提示にも主張表明にもなるもの

- JP 001-00 紙メディアの今日的意義

● KR041-00 インタネット新聞の便利さ

● TM022-00 新聞や雑誌の必要性

例えば、TM022-00は、「新聞や雑誌の必要性について」という話題提示とも「新聞や雑誌は必要だ」という主張表明とも解釈できる。

Ⅲ 非主張表明…課題文に対する書き手の意見・主張が明示されていないもの

● JP 130-00 新聞・雑誌の将来について <話題提示>

● TM004-00 インターネットと新聞 <話題提示>

● KR043-00 魅*力ある物 <主張不明>

● TM033-00 欠かないもの <主張不明>

タイトルの機能と、言語形式及び文章構造の型との関係を表6・7に示す。

表6 タイトルの機能と言語形式¹²

	JP	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	31(23.3)	33(24.8)	23(17.3)	87 (65.4)
	P: 助詞相当句	2 (1.5)	9 (6.8)	3 (2.3)	14 (10.5)
	O: 文末満	3 (2.3)	0 (0.0)	4 (3.0)	7 (5.3)
完全文	S: 文	10 (7.5)	1 (0.8)	3 (2.3)	14 (10.5)
	Q: 疑問文	1 (0.8)	0 (0.0)	10 (7.5)	11 (8.3)
	計 (%)	47 (35.3)	43 (32.3)	43 (32.3)	133(100.0)

表7 タイトルの機能と文章構造

	JP	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
頭型	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0.0)	2 (1.5)	
中型	0 (0.0)	1 (0.8)	1 (0.8)	2 (1.5)	
尾型	5 (3.8)	1 (0.8)	12 (9.0)	18 (13.5)	
頭尾型	35(26.3)	28(21.1)	18(13.5)	81 (60.9)	
頭中型	1 (0.8)	0 (0.0)	1 (0.8)	2 (1.5)	
中尾型	4 (3.0)	8 (6.0)	9 (6.8)	21 (15.8)	
分散型	1 (0.8)	3 (2.3)	2 (1.5)	6 (4.5)	
非明示型	0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)	1 (0.8)	
合計	47(35.3)	43(32.3)	43(32.3)	133(100.0)	

	KR	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	8(14.8)	4 (7.4)	11(20.4)	23 (42.6)
	P: 助詞相当句	0 (0.0)	1 (1.9)	0 (0.0)	1 (1.9)
	O: 文末満	4 (7.4)	0 (0.0)	3 (5.6)	7 (13.0)
完全文	S: 文	16(29.6)	0 (0.0)	3 (5.6)	19 (35.2)
	Q: 疑問文	2 (3.7)	0 (0.0)	2 (3.7)	4 (7.4)
	計 (%)	30(55.6)	5 (9.3)	19(35.2)	54(100.0)

	KR	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
頭型	2 (3.7)	0 (0.0)	1 (1.9)	3 (5.6)	
中型	1 (1.9)	0 (0.0)	3 (5.6)	4 (7.4)	
尾型	5 (9.3)	3 (5.6)	7(13.0)	15 (27.8)	
頭尾型	12(22.2)	0 (0.0)	3 (5.6)	15 (27.8)	
頭中型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
中尾型	9(16.7)	1 (1.9)	4 (7.4)	14 (25.9)	
分散型	1 (1.9)	1 (1.9)	1 (1.9)	0 (0.0)	
非明示型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
合計	30(55.6)	5 (9.3)	19(35.2)	54(100.0)	

	TM	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
不完全文	N: 名詞	5 (8.8)	4 (7.0)	15(26.3)	24 (42.1)
	P: 助詞相当句	0 (0.0)	2 (3.5)	0 (0.0)	2 (3.5)
	O: 文末満	2 (3.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.5)
完全文	S: 文	16(28.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (28.1)
	Q: 疑問文	0 (0.0)	0 (0.0)	13(22.8)	13 (22.8)
	計 (%)	23(40.4)	6(10.5)	28(49.1)	57(100.0)

	TM	I (%)	II (%)	III (%)	計 (%)
頭型	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
中型	0 (0.0)	0 (0.0)	6(10.5)	6 (10.5)	
尾型	3 (5.3)	0 (0.0)	9(15.8)	12 (21.1)	
頭尾型	8(14.0)	5 (8.8)	5 (8.8)	18 (31.6)	
頭中型	1 (1.8)	0 (0.0)	1 (1.8)	2 (3.5)	
中尾型	7(12.3)	0 (0.0)	7(12.3)	14 (24.6)	
分散型	3 (5.3)	1 (1.8)	0 (0.0)	4 (7.0)	
非明示型	1 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.8)	
合計	23(40.4)	6(10.5)	28(49.1)	57(100.0)	

表6より、JPのタイトルの言語形式は不完全文、特に「N:名詞」が多く、JPと学習者(KR・TM)の「N:名詞」の使用数には有意差があった($\chi^2(2)=13.011, p<.01$, JP対TM: $\chi^2(1)=8.924, p<.01$, TM対KR $\chi^2(1)=.003, p=.959, n.s.$, KR対JP: $\chi^2(1)=8.258, p<.01$)。JPによる名詞形のタイトルは、接尾辞「性」や形式名詞「もの」「こと」の使用、「と」「へ」等の格助詞+「の」、「による」「における」等の複合助詞、連体修飾節などによって実現されていた。これらは、学習者にとっては、産出が困難な難度の高い文法項目である。

- JP029-00 新聞・雑誌の必要性
- JP023-00 ネットが満たせないもの
- JP085-00 インターネットとの共存
- JP124-00 インターネット利用による情報伝達の利点
- JP116-00 インターネット時代における新聞・雑誌メディアの意義
- JP088-00 消費者が求める二つの情報媒体
- JP045-00 紙媒体の有用性
- JP066-00 重いということ
- JP098-00 ネット万能主義への疑問

また、以下のような「P:助詞相当句」も、学習者に比べJPに多く見られた。

- JP006-00 新聞・雑誌の必要性について
- JP022-00 新聞や雑誌の有用性をめぐって
- JP040-00 紙媒体パラダイムの完全なる消滅にむけて

「P:助詞相当句」は「～について」が計12例と圧倒的に多く、KRに1例、TMに2例見られたものも同じ形式であった。タイトルには情報伝達性と経済性という二つの特徴があるが(Soler 2007)、JPに多く見られた「P:助詞相当句」は学術的な論文のタイトルとしては冗長な印象を与える可能性もある。英語による研究論文のタイトルを研究したHaggan(2004)によると、前置詞句を用いたタイトルは自然科学分野の論文では0.3%のみで、文学で2.8%、言語学で3.4%であり、日本語の「P:助詞相当句」に該当する形式は、少なくとも英語論文では非常に稀である。日本語作文のタイトルの形式と機能を分析した研究は、管見では見当たらないが、タイトルは、読み手が内容を予測する重要な手掛かりとなり、アカデミックライティングには不可欠な要素であるため、今後更なる研究が必要であろう。タイトルの形式、機能の詳細な分析については別稿で論じたい。

一方、JPに比して学習者に多く見られたのは「S:文」と「Q:疑問文」をあわせた「完全文」である。特に、「Q:疑問文」はTMに特徴的であった。また、「O:文末満」は不完全文に分類されるが、KRは7例中5例、TMは2例中2例とも、名詞や形容動詞の語幹で終わる形式である。これらに叙述の「だ」が付けば、KRの完全文は28例(51.9%)、TMの完全文は31例(54.4%)となり、JPとの差はさらに大きくなる。これらの特徴は、意見文の要点を簡潔に名詞化して示すより、「AはB(だ)」の文形式で提示する方が学習者にとって負担が少ないことが一因であろう。

- KR050-00 まだ新聞や雑誌は必要だ <S>
- TM003-00 出版品は必要だ <S>

- KR032-00 今はインターネットの時代 <O>
- TM053-00 新聞と雑誌は必要 <O>
- TM036-00 新聞や雑誌はいらないの? <Q>

タイトルの機能をみると、JPはI・II・IIIタイプのいずれも同様に出現しているが、学習者に比べるとIIタイプが多い。「～の {必要性/価値/有用性}」など、一見話題提示に見える名詞形式を用いているが、これらは、「～には {必要性/価値/有用性} がある」という主張を内包しているとも考えられるため、話題提示にも主張明示にもなるものである。それに対し、KR・TMは、文の形式で端的に主張を明言するIタイプか、一般的な名詞で話題を提示するIIIタイプが多く、主張の明示度は両極に分かれている。

- JP037-00 新聞や雑誌の必要性 <II・N>
- JP043-00 新聞・雑誌の価値 <II・N>
- JP045-00 紙媒体の有用性 <II・N>
- TM049-00 新聞や雑誌は必要だ! <I・S>
- KR049-00 インターネット時代 <III・N>
- KR028-00 読むしゅうかん <III・N>

続いて、タイトルの機能と文章構造(表7)を見ると、タイトルから主張が読み取れないIIIタイプで、本文でも「はじめ」の部分に主張の明示がない文章構造(中型・尾型・中尾型・非明示型)の意見文は、JP22例(16.5%)、KR14例(25.9%)、TM22例(38.6%)で、TMがJPより有意に多かった($\chi^2(2)=10.889$, $p<.01$, JP対TM: $\chi^2(1)=10.907$, $p<.01$, TM対KR: $\chi^2(1)=2.032$, $p=.154$, n.s., KR対JP: $\chi^2(1)=2.176$, $p=.140$, n.s.)。逆に、主張が読み取れるI・IIタイプのタイトルで、本文でも「はじめ」と「おわり」で主張を述べる頭尾型の意見文は、JP63例(47.4%)、KR12例(22.2%)、TM13例(22.8%)で、JPと学習者の使用に有意差が見られた($\chi^2(2)=16.202$, $p<.001$, JP対TM: $\chi^2(1)=10.029$, $p<.01$, TM対KR: $\chi^2(1)=.005$, $p=.941$, n.s., KR対JP: $\chi^2(1)=10.110$, $p<.01$)。タイトルから読み始め、第1段落を終了してもなお書き手の主張が伝わらない意見文は読み手にかける負担が大きいため、日本語教育の立場からは推奨できず、意見文におけるタイトルの機能と主張の位置に留意した指導の必要性が窺われる。

3-3 主張の述べ方

最後に、「主張」と認定された文を取り出し、文の末尾にどのような言語表現が使われているか分析したところ(表8)、JP・KR・TMのいずれも、「主張」を表す文の末尾には「考える系」(例:考える/考えない/考えられる/考えている)・「思う系」(例:思う/思わない/思える/思っている)の思考動詞、「だろう」「のだ」等のモダリティ表現、「賛成だ/賛成する/賛同する/支持する」「反対だ/反対する」「～の立場である/立場をとる」などの立場表明の表現が多く見られ、JPでは全主張文の81.8%、KRは87.5%、TMは76.2%にこれらの言語形式が用いられていた。また、JPの「主張」の文末は学習者に比してモダリティ

表現の使用が多く、個別の言語形式では「だろう」と「考える系」の使用が目立つ。一方、学習者は「思う系」の使用が顕著であり、その他の言語形式の使用はあまり見られなかった。同じ表現の繰り返しは単調で内容も貧困な印象を与えやすい。森田（1989：265-266）、森山（1995）、新屋他（1999：12-19）によれば、「思う」は刹那的・感情的・個人的、「考える」は知的・分析的・客観的、「だろう」は断定ではないものの十分な根拠に基づき熟慮・検討した結果の推量であることを示す。学習者にも、「思う系」だけでなく客観性が高まる「考える系」や「だろう」などの表現を「おわり」の部分で使用できるよう、説得力のある議論の展開のし方とあわせて指導することが有効であろう¹³。

表8 主張の述べ方一覧

文末の言語形式		JP		KR		TM	
		頻度	%	頻度	%	頻度	%
モダリティ	だろう	38	12.6	2	1.8	3	2.4
	のだ	12	4.0	4	3.6	3	2.4
	のではない(だろう)か	8	2.6	2	1.8	4	3.2
	べきだ	5	1.7	1	0.9	1	0.8
	なければならない	2	0.7	0	0.0	2	1.6
	てはならない	3	1.0	0	0.0	0	0.0
	はずだ	1	0.3	1	0.9	0	0.0
	ばいい	1	0.3	0	0.0	0	0.0
	てほしい	1	0.3	1	0.9	0	0.0
	てもいい	0	0.0	1	0.9	0	0.0
	はずがない	0	0.0	0	0.0	1	0.8
	ではないか	0	0.0	0	0.0	1	0.8
	(し) そうだ	0	0.0	1	0.9	0	0.0
	みたいだ	0	0.0	0	0.0	1	0.8
	にちがいない	0	0.0	1	0.9	0	0.0
	わけではない	0	0.0	1	0.9	3	2.4
	わけにはいかない	0	0.0	0	0.0	1	0.8
小計	71	23.5	15	13.4	20	15.9	
思考動詞	考える系	71	23.5	4	3.6	6	4.8
	思う系	89	29.5	79	70.5	66	52.4
	小計	160	53.0	83	74.1	72	57.1
立場表明	賛成する／賛成だ	12	4.0	0	0.0	3	2.4
	反対する／反対だ	2	0.7	1	0.9	1	0.8
	～の立場である／立場をとる	2	0.7	0	0.0	0	0.0
	小計	16	5.3	1	0.9	4	3.2
総計		247	81.8	98	87.5	96	76.2
全主張数		302	100.0	112	100.0	126	100.0

さらに、JPの「主張」の言語形式と文章構造との関係について分析した結果、冒頭の第1文にある64例のうち55例（85.9%）、末尾の最終文にある110例のうち99例（90.0%）に表8に挙げた表現が使われていた。そして、冒頭文では、思考動詞46例（「思う系」26例、「考える系」20例）、立場表明の表現が8例で、モダリティの使用は「だろう」1例のみであった。これに対し、最終文では、思考動詞57例（「思う系」32例、「考える系」25例）、モダリティが39例（「だろう」24例、「のだ」「のではない（だろう）か」5例ずつ、「べきだ」3例、「てはならない」「なければならない」1例ずつ）、立場表明の表現は3例で、図1に示したよう

に、「主張」の文末表現は用いられる位置が対照的であった。

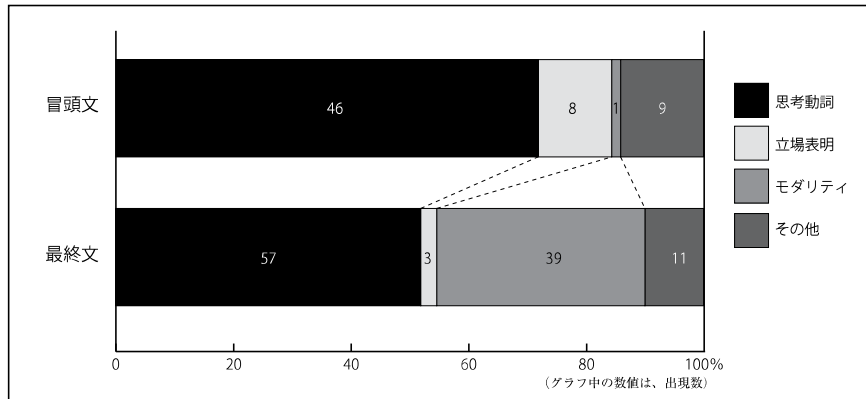


図1 JPの冒頭文と最終文の主張の言語形式

JPの冒頭文に用いられる立場表明の表現は、課題文の一部を引用し「私は～という意見に賛成だ」といった表現で賛成・反対の立場をまず表明してから根拠の説明に入るものが典型であった。冒頭で執筆者の立場が表明されれば、以後の読み手の推論を容易にし、論旨がくみ取りやすくなる。

- JP008-01 私は、「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」という意見に反対します。＜意見文冒頭＞
- JP055-01 私は、もはや新聞や雑誌は必要ない、という意見に賛成である。
＜意見文冒頭＞

一方、背景的情報から始まり、意見文の末尾の最終文で、「このような立場に立ち」「以上の理由で」「この点で」という接続表現を受けて立場を表明する文章構造も3編見られた。立場表明の表現が出現する位置は、冒頭の第一文と末尾の最終文で8割を占めていた。

- JP098-17 このような立場に立ち、私はこれからも新聞・雑誌が必要であるとの意見に賛成する。＜意見文末尾＞

続いて、最終文に各5例見られた「のだ」「のではない(だろう)か」の文章全体における出現位置を見てみると、「のだ」は12例中10例、「のではない(だろう)か」は8例中7例が段落のおわりに置かれる「主張」に用いられていた。「のだ」「のではない(だろう)か」は、「主張」以外のもも含めると148例であったが、その出現位置をみても、72例(48.6%)が段落のおわりに出現している。

- JP103-14 だからこそ、考えるという作業は非常に重要なのである。「根拠」
＜段落末尾＞
- JP057-15 そのための手段として、総合的に情報を扱っている新聞や雑誌といった紙

媒体のメディアが果たす役割は今後も失われることはないのではないだろうか。「主張」〈段落末尾〉

一方、段落のはじめでの出現は7例（4.7%）のみで、そのうち3例は、意見文の終盤で、「つまり」または「以上のように」という接続表現で新しい段落を「のだ」で開始するものである。次のJP046-12は、それまでに挙げてきた根拠から導かれた結論としての「主張」、JP096-08はそれまでに挙げてきた根拠をわかりやすく還元したもの、JP116-16はそれまで列挙してきた根拠をまとめたものである。

- JP046-12 以上のように、インターネットでニュースが見れるからといって新聞はいらなくなったという訳ではないのだ。「主張」〈段落冒頭〉
- JP096-08 つまり、新聞、雑誌を読むことの意義は、自分の知りたがっていた情報以外のことを知り得る、というところにあるのです。「根拠」〈段落冒頭〉
- JP116-16 以上のように、紙媒体にはインターネットにはない長所がいくつか存在するのである。「根拠」〈段落冒頭〉

モダリティ表現の適切な使用は、学習者にとって習得が難しい項目の1つと言われているが、このように機能と文章構造上の位置との関連を示すことができれば、有効な指導につながると思われる。

4 おわりに

以上、「主張」という言語行動に着目し、日本人大学生と日本語学習者による意見文をタイトルまで含めて構造的・包括的に分析した結果、次のような特徴が見出された。

- (1) JPの意見文は、「はじめ」と「おわり」に主張を置く頭尾型が60%、中尾型を合わせると76%であり、「(背景的情報)→主張→根拠→主張」という流れで意見文を構成するものが基本であった。一方、KR・TMは、頭尾型、中尾型、尾型がそれぞれ20%以上出現しており、典型的な文章構造の型は見られない。
- (2) JPは「はじめ」の第1文を「主張」か「背景」で開始するのが典型である。
- (3) JPは「おわり」の末尾の文も「主張」で締めくくることが多いが、KR・TMの末尾には、論の展開中に言及していなかった新しい視点が提示されることもある。
- (4) JPのタイトルの65%は名詞形であり、抽象名詞（必要性／重要性／信頼性／意義など）、接尾辞「性」、形式名詞「もの」「こと」の使用、「と」「へ」等の格助詞＋「の」、「による」「における」等の複合助詞、連体修飾節などによって名詞形が実現されている。
- (5) JPのタイトルは学習者に比して、話題提示にも主張表明にもなるものが多いが、KR・TMは完全文の形式で主張を表明するものと、名詞形式で主張が明示されないものの両極に分かれる。TMは疑問文の使用も多い。
- (6) 主張がタイトルから読み取れ、本文も頭尾型の構造のものはJPに多く、主張がタイ

トルから読み取れず、本文の「はじめ」の部分でも明示がないものはTMに多い。

- (7) 「主張」には、思考動詞・モダリティ・立場表明の表現が用いられているが、JPの言語表現には出現位置に特徴が見られるものもある。KR・TMは「思う系」の使用が顕著である。

本研究では、JP・TM・KRの3者間の文章構造上の特徴の記述を試みた。今後、評価の観点や学習者の母語による作文教育も視野に入れ、意見文の文章構造、タイトルの付け方、議論の流れ、言語表現の使用を実証的に捉えていくことにより、日本語母語話者および学習者の言語行動の異同とその要因について分析を進め、具体的指導項目を提案していきたい。

付記

本研究は、平成19年～22年度文部科学省科学研究費若手研究(B)「日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるモダリティ使用」(研究代表者:伊集院郁子、課題番号19720119)の助成を受けて行われた。

注

- 1 本分析データは、2011年6月に「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」という名称で、以下のウェブサイトにて一般公開した。
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/koukai_data1.html
- 2 実際の日本語習得レベルを知る目安としてSPOTも実施した。SPOTは筑波大学留学生センターで開発された日本語能力簡易試験で、音声テープを聞きながら空欄にひらがな一文字を書き込む形式である。日本語能力試験の1級レベルと2級レベルを識別するために、音声の聞き取りが難しいver.2(65点満点)を利用した。結果は、KRの平均点が50.7点、TMが45.3点であった。この差については、1年以上の日本滞在経験者がTMは1名のところ、KRは11名含まれていたことが一因となっている可能性がある。学習者のレベルの厳密な設定については、今後の課題としたい。
- 3 データサンプル数の問題から、本研究ではコーディングが一致しなかった文を分析対象から除外せず、分析者2名の協議によって全ての文に機能を割り当てる分析手法をとった。この方法により、把握しにくい論理展開の作文も読み解くことが可能となったが、協議による解釈が執筆者の本来の意図とは異なる可能性も依然として残っている。この点は本分析手法の限界と言わざるを得ないだろう。
- 4 木戸(1992)は、主張には、テーマに対する書き手の賛否の意見、テーマに対する発展的意見(賛否から発展して、提案や要望などの意見を表明する文)の2種類が認められる、としている。本分析でも、同様の立場をとる。
- 5 新聞の社説を資料とし、韓日両言語間の主張の表し方を文章構造の面から比較対照した李(2008)では、主題文の認定にタイトルの反復が重視されているが、本研究では、文章の書き手は大学生で、文章も十分な推敲を経たものではないため、2名が一致して主張と認定した文や課題文の反復の度合いも判定基準に加えた。
- 6 佐久間(1990)、木戸(1992)では、文章構造の型として、「頭括式」「中括式」「尾括式」「両括式」等の用語が使われているが、本分析は「統括」(「文章を通して最も重要な役割を演ずる部分が全体をどのように統一し、完結感を与えるかという関係を見る」(永野1986:103))という概念での分析ではないため、同じ用語を用いるのは避けた。
- 7 冒頭で主張を表明する割合が佐々木(2001)ほど高くなかったのは、課題文の指示内容の相違に起因すると考えられる。本研究では、「あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。」という一般的な問いかけを行ったのに対し、佐々木(2001)では、「あなた自身の考えを、規制反対か賛成か必ずどちらかの立場に立たううえで、日本語で論じてください」(下線は筆者による)という指示文が提示されている。佐々木(2001)でも既にその可能性が指摘されているように、この指示文の文言が冒頭での主張表明の増加につながったと考えら

れる。

- 8 同様の例はKRに6例、TMに3例あった。
- 9 3者間の検定に関しては、全体の分析後、2つの母語を比較するため同じ分析を3回繰り返した。第1種の誤りを犯す確率が高くなるのを避けるため、Bonferroniの調整を行った。3回の繰り返しなので $0.05 \div 3 = 0.017$ となるため、1%を有意水準として検定した。
- 10 「補足」とは、主張についてそれまでとは別の角度から補足的に言及しているもので、私的または感情的な見解や、主張の認定基準を満たさなかったコメントが含まれる。
- 11 例文は原文のままであり、誤用の修正はしていない。例文中の「*」は文字にわずかな誤記のあることを示す。
- 12 JPにタイトルなしの作文が1つ、KRに誤用のため分類不能のタイトルが1つあったため、JPとKRの計の数値は、作文総数より1ずつ小さくなっている。また、「S:文」は「Q:疑問文」以外の文である。
- 13 「だろう」は、学習者が初級の段階で「でしょう」という文法項目で学習済みであるが、書き言葉で有効に利用することは容易でないことがわかる。初級で理解語彙として導入して終わりにするのではなく、庵(2009)が指摘するように、中級で意見文などを執筆する段階になって「だろう」の推量用法をしっかりと産出できるよう、文章の展開の方法とあわせて指導するのがよいと考えられる。

引用文献

- 荒木晶子・向後千春・筒井洋一(2000)『自己表現力の教室—大学で教える「話し方」「書き方」—』情報センター出版局
- 李貞旼(2008)『韓日新聞社説における「主張のストラテジー」の対照研究』ひつじ書房
- 庵功雄(2009)「推量の『でしょう』に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』142号, 58-68.
- 木戸光子(1992)「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55号, 9-19.
- 木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書
- 佐久間まゆみ(1990)「ケース8 文章の構造類型」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(編)『ケーススタディ 日本語の文章・談話』おうふう, pp.94-105.
- 佐々木泰子(2001)「課題に基づく意見の述べ方—日本人大学生の場合・日本語学習者の場合—」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11年度～12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号11691041), 219-230. http://jpfornlife.jp/pdf/pr_01-27_sasaki.pdf (2011年9月6日)
- 佐渡島沙織・吉野綾子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代(1999)『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 杉田くに子(1994)「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴—文配列課題に現れた話題の展開—」『日本語教育』84号, 14-26.
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里(1998)「第二言語としての日本語における作文評価—『いい』作文の決定要因—」『日本語教育』99号, 60-71.
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 二通信子・佐藤不二子(2003)『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 長谷川哲子・堤良一(2007)「『分かりやすさ』を決める要因は何か?—どのような文章が

- 分かりやすいと評価されるか-」『2006年度日本語教育学会第10回研究集会関西地区予稿集』, 65-68.
- メイナード、泉子・K. (1997) 『談話分析の可能性-理論・方法・日本語の表現性-』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎(1995)「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞~φ」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法』くろしお出版, pp.171-182.
- 吉田美登利 (2011) 「意見文産出過程の方略の分析-作文評価が高い学習者と低い学習者の比較-」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3号, 21-32.
<http://www.academicjapanese.org/journal03.html> (2011年9月9日)
- Haggan, Madeline(2004) Research paper titles in literature, linguistics and science: Dimensions of attraction. *Journal of Pragmatics*, 36(2), 293-317.
- Hinds, John(1987) Reader versus writer responsibility: A new typology. In U. M. Connor & R. B. Kaplan(Eds.), *Writing across languages: Analysis of L2 text*. MA: Addison Wesley. pp. 141-152.
- Lee 風子 (2006) 「留学生の書く日本語意見文の分析-日本人学生との比較において-」『立命館法学別冊 山口幸二教授退職記念論集』, 399-412.
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/kotoba05/LEE.pdf> (2011年9月6日)
- Soler, Viviana(2007) Writing titles in science: An exploratory study. *English for Specific Purposes*, 26(1), 90-102.

Structural Characteristics of the Japanese Opinion Essays by Japanese Native Speakers, Korean and Taiwanese Learners: Focus on “Assertions”

Ikuko IJUIN, Tokyo University of Foreign Studies

Keiko TAKAHASHI, Toyo University

This paper analyzes the structure of opinion essays written in Japanese by Japanese (JP), Korean (KR) and Taiwanese Mandarin (TM) speaking university students from the following four vantage points:

- ① Textual structure format
- ② Form and function of the title
- ③ Title and main body textual structure
- ④ Method of conveying assertions

The results revealed the following characteristics:

- ① In 60% of the cases, JP students laid out their assertions in the “introduction” and the “conclusion” in a head and tail format. TM and KR students appeared to be spread out, with the head and tail format, the middle and tail format and the tail only format comprising more than 20% each.
- ② Compared with the TM and KR students, the JP students utilized more noun forms in the formation of their titles. Many of the KR and TM students utilized full sentence or interrogative forms to express their assertions in their titles.
- ③ The assertions were easy to glean from the title and continued to be expressed in the introduction and conclusion in the case of many of the JP students. It was especially the case of the TM students that the assertions were not easy to discern from the title, nor were they expressed right away in the introduction.
- ④ Opinion verbs, modality, and supporting position expressions were primarily used to convey assertions. Some of those expressions have different tendencies depending on where they appear.